

中国日本学研究优秀
硕士论文『卡西欧杯』

获奖
论文选

(二)

北京日本学研究中心◎编



中国日本学研究优秀硕士论文 “卡西欧杯”获奖论文选 (二)

北京日本学研究中心 编

學苑出版社

图书在版编目(CIP)数据

中国日本学研究优秀硕士论文“卡西欧杯”获奖论文集.2/北京日本学研究中心编. —北京:学苑出版社, 2010.9

ISBN 978-7-5077-3649-6

I. ①中… II. ①北… III. ①日本—研究—文集 IV.
①K313.07-53

中国版本图书馆CIP数据核字(2010)第188534号

责任编辑: 韩继忠

出版发行: 学苑出版社

社址: 北京市丰台区南方庄2号院1号楼

邮政编码: 100079

网 址: www.book001.com

电子信箱: xueyuan@public.bta.net.cn

销售电话: 010-67675512、67678944、67601101(邮购)

经 销: 新华书店

印 刷 厂: 永恒印刷有限公司

开本尺寸: 787 x 1092 1/16

印 张: 23.75

字 数: 470千字

印 数: 0001—1000册

版 次: 2010年9月第1版

印 次: 2010年9月第1次印刷

定 价: 50.00元

**此论文集的出版得到
卡西欧（上海）贸易有限公司的资助**

主 编 徐一平

执行主编 秦 刚 潘 蕾

前書き

中国日本語教学研究会、教育部高等教育外国語専攻教育指導委員会日本語部会、北京日本学研究中心の共催による『第二回中国日本学研究「カシオ杯」修士論文コンテスト』は、カシオ上海貿易株式会社のご支援と全国日本語日本文学専攻修士課程が開設されている大学のご協力の下で、2009年の秋予定通りに行われました。今回の参加校と推薦された優秀論文は、前回よりもさらに増え、33の大学から41本の優秀修士論文が推薦されました。これらの優秀修士論文は、各大学の修士課程教育の成果であり、いずれも各大学の先生たちが丁寧に指導された結果であります。昨年と同じように、全国各大学の日本学研究の専門家による厳しい予備審査と最終審査を通して、一等賞、二等賞、三等賞の論文が決定されました。第一回の論文集に引き続き、ここの中から二等賞以上の論文を選び、論文集の第二編を上梓することになりました。

ところで、昨年は故日本の首相大平正芳氏が首相として中国訪問30周年に当たります。そして、今年は大平首相が生誕100年の年になります。このことを記念して、北京日本学研究中心は昨年大平正芳記念財団と協力して、「大平正芳と中日関係」と題する記念シンポジウムを行いました。このシンポジウムの基調講演に立たれた元文化部副部長劉徳有先生が、中国訪問当時大平首相が講演されたことを紹介しました。その講演の中で、大平首相は次のように述べました。

国と国との関係において最も大切なのは、国民の心と心の間に結ばれた強固な信頼であります。この信頼を裏打ちするものは、何よりも相互の国民の間の理解でなければなりません。

しかしながら、相手を知る努力は、決して容易な業ではないのであります。日中両国は一衣帯水にして二千年の歴史的、文化的つながりがありますが、このことのみをもって、両国民が十分な努力なくして理解し会えると安易に考えることはきわめて危険なことではないかと思えます。ものの考え方、人間の生き方、物事に対する対処の仕方に日本人と中国人の間には明らかに大きな違いがあるように見受けられます。

我々は、このことをしっかり認識しておかなければなりません。体制も違い流儀も異なる日中両国の間においては、尚更このような自覚的努力が厳しく求められるのであります。このことを忘れ、一時的なムードや情緒的な親近感、更には、経済的な利害、打算のみの上に日中関係の諸局面を築き上げようとするならば、それは所詮砂上の楼閣に似たはなく、脆弱なものに終わるのであります。

国民の間の相互理解の増進を図る一つの有力な手段が、言語であることは、いまさら申すまでもありません。

わが国においては、古来、中国の漢籍が日本文化の一部を構成していることはご承知の通りであります。また近年、現代中国語の学習熱が盛んになりつつあることは極めて喜ばしいことであり、政府としてもこれを奨励してまいりたいと考えております。……中国における日本語の学習が中国の人々の日本の社会及び文化自体に対する幅広い関心の高まりにつながることを強く期待するものであります。

以上のような相互理解の努力を通じて、世界の平和とアジアの安定の創造に寄与する日中両国の関係をより深くより広く推し進めていくことこそ、今日、両国民に課せられた最も大きな課題であると信ずるものであります。

以上のことばは、30年間たった今になって聞いても、本当に当を得た素晴らしいことばだと思います。正にこのような理念の下で、1980年、両国政府の協力の下で、「全国日本語教師培訓班」いわゆる「大平学校」が設立されたのであります。その「大平学校」が後に今日の「北京日本学研究センター」に変わり、今年がその「大平学校」成立30周年、北京日本学研究センター成立25周年になります。この間、この中日双方の協力事業は、中国の日本学研究事業のために、およそ1500名のハイレベルな人材を養成しました。更に、日本語教育を通して、日本という国、日本民族そして日本文化への理解を深めようとする理念も、中国日本語教育界で浸透されつつあります。ここに掲げられた一編一編の優秀修士論文は、正にそのような理解を深めた成果の賜物ではないでしょうか。

私たちは、このような理解がもっと深まり、このコンテストが更に継続していくために努力していきたいと決意しております。そして、このコンテストをご支援して下さったカシオ上海株式会社の皆様に感謝し、このコンテストに参加された各大学の先生と学生の皆様にも感謝し、今後もこのコンテストの発展のためにご協力いただきたいとお願いして、前書きのことばとして替えさせていただきます。

北京日本学研究センター

主任 徐 一平

2010年7月

祝 辞

欣闻《中国日本学研究优秀硕士论文“卡西欧杯”获奖论文选(二)》付梓,谨代表中国日语教学研究会表示衷心的祝贺!也借此机会向为本次文集的编辑、出版,以及中国日本学研究优秀硕士论文评审的组织付出辛勤劳动的徐一平教授等北京日本学研究中心的各位,向支持硕士研究生论文评审的卡西欧公司、积极参与的各参赛学校表示诚挚的感谢!

中国的日语教育特别是高等学校的专业日语教育,最近十年取得了令世界瞩目的业绩。据不完全统计,设有日语专业的四年制高校(含独立学院)已经达到484所,其中61所学校设有日本语言文学专业的硕士课程。这说明中国的专业日语教育无论是规模、层次和质量都已经走在世界的前列。“卡西欧杯”中国日本学研究优秀硕士论文大赛的举行,是我国专业日语教学历史上具有重要意义的一件大事,是我国日本学硕士研究生教育逐步走向成熟的重要标志。这项赛事也日趋成为中国日语教育界重要而且具有权威的大赛之一,必将促进我国硕士研究生日本学教学和研究水平的提高。

最近两届世界日语教育大会的主题分别是“日语教育与日本研究的协作”(2009 悉尼大会)、“日语教育与日本研究的交叉(2010 台北大会)”,说明世界日语教育的趋势之一是日语教育与日本学研究的交叉与融合。我认为,硕士阶段的教育是体现这一融合与交叉的重要阶段之一。硕士阶段在提高运用日语进行跨文化交际能力的同时,要掌握研究日本语言、日本文学、日本社会文化的研究能力。各硕士培养单位应该努力在硕士生课程设置、强化教学的基础上,鼓励研究生围绕日本学研究的重要选题开展好研究,写出高质量的论文,为中国日语教育与日本研究的交叉融合,为保证我国的日语,特别是研究生日语、日本文学、日本社会教育与研究始终走在世界前列作出贡献。

在这个意义上讲,《中国日本学研究优秀硕士论文“卡西欧杯”获奖论文选(二)》的出版是一件可喜可贺的大事,论文集收录的获奖论文可以说是目前硕士研究生阶段日本学研究的典范之一。衷心希望广大导师和研究生能够从中获益,进一步促进硕士阶段研究生论文的写作规范化,提高论文的学术水准,进而使我国研究生阶段的教育与研究迈向新的台阶。

中国日语教学研究会会长 修 刚

寄 语

由衷祝贺《中国日本学研究优秀硕士论文“卡西欧杯”获奖论文选(二)》的诞生!

研究生教育不仅是知识的传承,而且是研究能力的培养。研究生教育更需要培养独立研究、独立思考的能力。作为人文学科之一的日语语言文学专业的研究生,应特别注重对经典文本的阅读,注重对一些长久乃至永恒问题的思考。我们殷切希望研究生们广泛接触社会,与各种人打交道,具备解决具体问题的能力,对现实具有高度的敏锐性。研究能力的衡量标准,从研究生教育的整个过程来看,应包括课程教育、科研活动、社会实践、论文写作等不同方面,其中阅读语言工具的运用能力亦是不可忽视的领域。研究生应尽早使自己的外语及古汉语水平达到能真正自如运用这些语言表达思想、创见的水平。为此,每年一度的日本学研究优秀硕士论文评比有其十分积极的意义。

虽然我国的日语研究生教育还处在建设发展期,但中国的日语教育界将十分珍惜目前的大好形势,会紧紧抓住教育发展的大好机遇,将日语专业研究生教育建成以语言文学类学科为主干,各大人文学科有机结合的多学科体系,为国家的现代化建设培养更多优秀的高级专业研究人才。

让我们全体师生共同努力!

教育部高等学校外语专业教学指导委员会日语分委员会主任
中国日本文学研究会会长、上海外国语大学常务副校长

谭晶华

目 次

前書き	(1)
祝 辞	(3)
寄 語	(4)

言語研究部門

一等賞

石立珣 「する」を伴わない動名詞の動詞性について ——連用格と共起可能な「動名詞＋中」構文を中心に	(3)
--	-----

二等賞

史 曼 有対自動詞の意味特性・ヴォイス表現に関する研究	(40)
-----------------------------------	------

二等賞

沈胡婷 現代日本語の可能表現について ——「実現表現」のプロセスと文法的特徴を中心に	(84)
---	------

二等賞

孙文选 「おる」の歴史的変遷について ——語義・用法を中心に	(114)
---	-------

文学研究部門

一等賞

梁 青 「新撰万葉集」の比較的研究 ——和と漢と	(151)
-----------------------------------	-------

二等賞

张 芸 和歌の序詞と『詩経』の興との比較研究	(193)
------------------------------	-------

二等賞

郎 叙 「静物」への試論 ——構造主義の視点から	(247)
-----------------------------------	-------

社会文化研究部門

一等賞

- 刘一君 日本「価値観外交」及びその戦略意図の探究 (287)

二等賞

- 朱雯瑛 五山禅僧の人間像に関する一考察
——絶海中津を中心に (328)

- 2009 年『中国日本学研究「カシオ杯」修士論文コンテスト』入賞者 (361)

- 2009 年『中国日本学研究「カシオ杯」修士論文コンテスト』審査員 (364)

言語研究部門

「する」を伴わない動名詞の動詞性について ——連用格と共起可能な「動名詞＋中」構文を中心に

石立 珣

目 次

第1章 序論

1.1 問題提起

1.2 先行研究

1.2.1 動名詞

1.2.2 本研究の研究対象を扱った先行研究

1.2.3 先行研究の問題点と本研究の立場

第2章 名詞性と動詞性

2.1 名詞

2.2 動詞

2.3 名詞と動詞の比較

第3章 「動名詞＋中」構文における動名詞の動詞性の現れ

3.1 用例分析

3.2 「動名詞＋中」構文の特徴

第4章 「する」を伴わない動名詞の動詞性の成立条件と成立原因

4.1 「する」を伴わない動名詞の動詞性の成立条件

4.2 「する」を伴わない動名詞の動詞性の成立原因

4.2.1 「動名詞＋する」の動詞性について

4.2.2 「動名詞＋中」構文における動名詞の動詞性について

第5章 本稿のまとめと今後の課題

5.1 本稿のまとめ

5.2 今後の課題

第1章 序 論

1.1 問題提起

影山(1993)は、「する」を伴って動詞化する表現を「動名詞」と呼ぶと定義している。例えば「する」と結合して、「散歩する、研究する」になる「散歩、研究」は動名詞である。

動名詞自体が名詞であるが、純粋な名詞と異なり、「する」をつけて動詞化する。したがって、名詞と動詞の両方の性質を兼ね備えていると思われる。

現代日本語には、下記のような用例がある。動名詞は、「する」を伴わないにもかかわらず、名詞の「ヲ格」や「ニ格」などの連用格を受け^①、動詞の性格を持っている。

- 1) (前略) バイク を 運転中 にバスに追突し、せき髄を損傷した。(朝日 1999. 11. 28)
- 2) 本人とは 富士山観測所 に 勤務中 に一度会ったことがある。(孤高の人)
- 3) 大学 を 卒業後、金が必要になったら働いて、あとは遊んで暮そうと思っている者もいた。(ハワイ——私の第一歩)
- 4) むろん 佐世保 へ 回航の折 と同じように、警戒隊を海岸線一帯に配置し、厳重な警戒態勢がとられることになっていた。(戦艦武蔵)

上の例においては、動名詞「運転、勤務、卒業、回航」は、動詞の形態を備えないにもかかわらず、「ヲ格」や「ニ格」などを受ける。通常のかえ方によれば、動詞こそ、「ヲ格、ニ格」などが受けられる^②。特に対象語を表す「ヲ格」が受けられるのは動詞しかないと思われる。従って、「ヲ格」や「ニ格」などの連用格を受ける点では、用例における「運転、勤務、卒業、回航」は、明らかに動詞の性質を持っていると言える。ただし、「する」を伴わないため、動詞の形態論的特徴は見られない。それにしても、「運転、勤務、卒業、回航」が文中において、動詞の性質を有することは否認してはならない。つまり、動名詞は、動詞の形を備えなくても、依然として動詞の性質を表すことができると言えよう。それでは、なぜこのような表現は成立するのか、という疑問が生じてきた。

さらに、調べたところ、動名詞が「する」を伴わないにもかかわらず、名詞の連用格を受ける表現が上述用例のほかにも何種類も存在することが分かった。

①敬語や依頼表現

- 5) この提案 を よろしくご検討ください。
- 6) 新車 を ご購入のお客様、下の手順に従って申し込みをしてください。

① このような現象は、格支配とも言う。動詞の格支配(case government)については、高橋(1995)は、「動詞が文のなか(あるいは、連語のなか)で、名詞の特定の格と組み合わせるとき、その動詞がその格を支配するという(pp. 67, 68)」と述べている。「くう」という動詞は、「めしをくう」のように対格を支配し、「のる」という動詞は「電車にのる」のように、与格を支配する。また、「おしえる」という動詞は、「学生に文法をおしえる」のように、与格と対格を支配するとしている。影山(1993)では、動詞が格を支配する現象を格付与という語を用いている。格支配、格付与の他に、格を取るという言い方もある。格支配や格付与や格取りは、いずれも動詞が連用格を受ける特質に従い、連用格共起可能という範囲に属している。したがって、本稿では、連用格を受ける、あるいは連用格共起の角度から論を進める。論述の必要上、格支配も兼用する場合もある。「格支配」を言及する場合は、高橋(1995)に従うことにする。

② 日本語の形容詞には、「～に等しい、～に相応しい」のように、「ニ格」を支配する現象があるが、動詞ほど格支配が発達していない。例えば、形容詞は、まず「ヲ格」を支配しない。本稿では、主として動詞の格支配を扱うため、形容詞の格支配を捨象する。

②動名詞+だ・です③

7) 明日、社長はアメリカに出張です。

(動名詞は結びの「だ・です」の助けによって、述語になる。)

③動名詞と「ニ」が構成する目的表現

8) 英語を勉強に行く。

(このパターンは、すでに固まった形式になる。)

④モダリティーを表す「～のこと」

9) 厳重に火の元を点検のこと。

(「～のこと」というパターンは文末でしか使えなく、すでに固定されている表現となった。総て「～してください、～せよ」という命令形に換言できる。「厳重に火の元を点検してください。」)

⑤「～の可能性、～の疑い、～の噂」などを含む可能性を表す表現

10) 社長が辞任の可能性

11) その旅行者は肝炎に感染の疑いがある。

12) 田中氏は女優と密会の噂がある。

(「～の可能性、～の疑い、～の噂」はすべて気持ち的なものを表すものである。総て「～かもしれない、らしい、ようだ」に言い換えられる。この点では、④「～のこと」と同様、一種のモダリティー表現として理解してもいい。しかし、⑤は④ほど固定してないので、別の種類に分けることにした。)

⑥特殊な表現

13) (駅のアナウンス) 二番線に到着の電車は急行××行きです。

(このような表現は、通常の話し言葉では使わない。極めて特殊な、硬い場合に使われる。)

上記の6種類においては、「する」を伴わない動名詞は、「ヲ格」や「ニ格」などの連用格を受ける点が特徴である。従って、上掲の用例と同じく、動名詞は、「する」を伴わないにもかかわらず、動詞の性質を有すると言えよう。しかし、括弧の注釈のように、各種類は、動詞の敬語表現やモダリティー表現やそれぞれ条件付の特殊な表現であることが分かった。しかも、①敬語・依頼表現 ③目的表現を除き、他の種類は、極特別な場合にしか用いられない。用例数も少ない。

したがって、紙幅も考慮して、本稿では、例1)～4)のような、連用格を受ける「動名詞+中」、「動名詞+後」のような構文(以下は、このような構文を「動名詞+中」構文④」と

③ 鈴木(1978)によると、名詞は「一である」「一ではない」などや結びのくつつき「だ」「です」の助けによって、述語になることができる。この特性は、動詞の特性と共通することである。(『日本語文法・形態論』, pp. 178)。

④ 例1)～4)のような、連用格を受ける「動名詞+中」、「動名詞+後」のような構文については、ふさわしい名前が見つからないため、とりあえず最初に筆者の関心を引いた「バイクを運転中に…」のような構文にふさわしい名前、つまり「動名詞+中」構文という名前を仮の名前とする。

略称する)に注目し、「する」を伴わない場合の動名詞の動詞性について検討する。

1.2 先行研究

本節では、まず、動名詞についての先行研究の記述をまとめ(1.2.1)、次に本研究の研究対象を扱った先行研究を概観する(1.2.2)。その上に、先行研究の問題点と本研究の目的を明示する(1.2.3)

1.2.1 動名詞

動名詞という概念については、鈴木(1972)、影山(1993)、高橋(1995)、小林(2004)らが言及した。これらの学者の主張する動名詞の定義は、大別して2種類ある。一つは、鈴木(1972)と高橋(1995)の主張している動名詞である。もう一つは、影山(1993)、小林(2004)の主張している動名詞である。以下は、それぞれの主張を確認していく。

(一)鈴木(1972)・高橋(1995)

鈴木(1972)は、「動詞にくっ付きの「の」をつけて、そのあとに格のくっつきや取立てのくっつきをつけると、動詞は名詞と同じような働きをする。これを動名詞という(pp. 407)」と述べている。(用例は同書より引用し、下線も原文のままである。)

14)ぼくは、あそぶのが すきだ。あそぶのは、きょうかぎりだ。

15)ぼくは、あそぶのに あきた。あそぶのも、必要だ。

鈴木(1972)『日本語文法・形態論』

下線の「あそぶの」は鈴木(1972)の言う動名詞である。

高橋(1995)は、「動詞で終わる主語句、主語節、補語句、補語節の中で、動詞は、連体形のあとに「の」、終止形のあとに「か」のついたかたちであられる。このかたちは、うえにたいしては、名詞の連用格を支配したり、副詞などの修飾語を受けたりして、動詞として働くが、それ自身は曲用^⑤して、したに対して、名詞として働く。これを動名詞という(pp. 129, 130)」と述べている。(用例は同書より引用し、下線も原文のままである。)

16)あなたが いらっしゃるのを ずっと まって いたのですよ。さあ、はやく
おあがりください。

17)その ためには、これを いつまでに しあげるかを きめなければ ならない。どこで するかは、その あとで きめれば よい。

18)正面に みつつ くっついて、ならんで いるのが ヤマノジヤマ、その みぎのあたまが ぼうっと かすんで いるのが ホウタカヤマです。

高橋太郎(1995)『日本語の文法』

高橋(1995)では下線部の「いらっしゃるの」、「しあげるか」、「するか」、「ならんでいるの」、「すんでいるの」が動名詞であると主張している。

上記のとおり、鈴木(1972)は動詞の連体形のあとに「の」が付いた形は動名詞である

⑤ 曲用とは、名詞的語形変化のことである。名詞が名詞らしいのは、曲用するからである。(高橋(1995)『日本語の文法』, pp. 31)。